十七文字の抒情詩

四月に入って霜が降りたり・・
暖かい日と寒い日の差がはげしく、身体がついて行けません。
それでも桜は満開で、日本に生まれてよかったと
いつもながらに思います。
今回もお二人から投句いただきました。

まずはうさおさんの句です。

子連れ鴨鷺舞い降りて小川かな

中七の降りて・・というのが少し気になります。
＊子連れ鴨も鷺も降り立つ小川かな

菜の花と桜とこぶし宴長けて

春の花がいっぱいですね。ただ沢山材料がありすぎて、反対にぼけてしまうので一つに絞られた方が良いのではないでしょうか。
＊菜の花の宴のごとく咲き揃ふ
＊花の下花の競演宴長けて

花曇りにぎわうひとの寛永寺

実際には曇りだったのでしょうが、賑わうというのなら花盛りとか満開の方が季語としてはマッチします。花曇りを使うのならば中七を違う言葉にされると良いと思います。意味は違ってくるかもわかりませんが、句として内容が広がるように思います。
＊花曇り黙の列往く寛永寺

朧月輪王殿の花化粧

面白い句ですね。輪王殿の花化粧？朧月を見てそう感じられたのでしょうか？
いろいろと想像できますね～花が桜ならば大きな季語が二つになりますが、朧月が輪王殿が化粧をしている様だとされたのなら季重なりも気にならないと思います。

人垣を縫って縫っての花見かな

この句もとても良いです。中七の縫って縫っての繰り返しが効いています。

続いて、健さんの句です。

旧姓で呼ぶ人ありぬ春の雷

意味深な一句・・・季語でますます興味が・・

＊旧姓で呼びとめる人春の雷

土手上に自転車２台春の風

土手上でも良いですが、素直に土手を行くとされると、
走っている自転車が見えてきます。

＊土手を行く自転車二台春の風

浅草や柳の幹に投句箱

面白いです。や・・が効いているかな、とも思いますが、
このままでも充分です。

＊浅草や柳の幹の投句箱

空箱の中に空箱四月馬鹿

この句面白いです。季語も良いですし、空箱の中にまた
空箱が入っている
単にそれだけではなく季語でもっと広い意味にも取れて
面白い句になっています。

お二人とも季語の使い方がお上手になられましたね。
季語ひとつで、その句が一段と広がるのです。
歳時記を読むだけで、季語の持つ力がわかりますよね。
次回も宜しくお願いします。

早足をゆるめものの芽確かむ

木の芽和女は小さき幸に酔ふ　　ゆうこ